

性別認識過程におけるジェンダーの影響と保育（Ⅱ）

—発達初期における玩具の好みに性差はあるか—

○清水絵美* 金田利子**

(静岡大・院*, 静岡大**)

目的 性別認識過程にある保育園の2歳児はどのように性別を認知し、そこにはどのようにジェンダーがはいってきているのかについて昨年（Ⅰ）で報告した。今年（Ⅱ）では昨年からの観察の継続とともに、性別認知以前から生得的な男女の差というものが見られるのか、性別認知しつつある時にはどうかということを実証的にとらえ、ジェンダー・フリー保育を考えるひとつの手がかりとする。

方法 昨年は保育園における2歳児クラスの保育場面での継続的な参加観察を行なったが、今年は同じ子どもたちを3歳児クラスとして継続して観察しつつ、2歳児クラスにおいても観察を行ない、昨年の検証とした。さらに1, 2歳児クラスにおいて「女児用」「男児用」玩具を設置して実験を行なった。

結果 2歳児クラスの初期の段階では、遊びなどにおいて男女の違いはみられないものの2歳児クラスの後半になるにつれ、違いがあらわれてくる傾向が見られた。このことは玩具設置実験においても同様の結果となり、年齢が小さいほど性による違いが見られていないことから、遊びにおいて生得的な男女の差はほとんどないのではないかと思われた。また、性別認知の分かれ目にいる子どもたちはジェンダーに対して比較的柔軟であったものが、自分の性別を正しく認知してゆくにつれジェンダーも徐々に固定的になってゆく様子が見られた。子どもたちは保育者による言葉かけ、絵本、文化的行事などにおいてジェンダー・バイアスと接しており、これらの影響をできる限り少なくするよう配慮した保育が望まれると考えられた。